広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 日本語の慣用句・英語のイディオムにおける色彩を使う感情表現メタファー : メトニミーと認知メタファー理論に基づく意味理解およびその文化性 |
| Author(s) | ハッタヤーナン, ナパット |
| Citation | 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 30期 : 52 - 75 |
| Issue Date | 2015-10-30 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038676 |
| Right | |
| Relation | |

# 日本語の慣用句・英語のイディオムにおける
# 色彩を使う感情表現メタファー

## ―メトニミーと認知メタファー理論に基づく意味理解およびその文化性―

ハッタヤーナン・ナパット

## １．はじめに

本研究の目的は日本語の慣用句・英語のイディオムから色彩を使う感情表現を取り上げ、メトニミーと認知メタファー理論に基づいて、どのような概念メタファーが成立するかを分析することである。その概念メタファーの意味理解のプロセスに関してはどのような共起性基盤に基づくかを説明する、また、どのような文化・文学・歴史的な背景、すなわち文化性があるかを探っていく。

ところで、感情表現といえば、まず考えなければならないのは社会や文化との関係である。それは、感情が普遍的なものか、言語や文化によって決定される特殊性を備えたものか、という問題でもある。つまり、人間の感情は本能的なもので、自然発生的に内部から生成されるもの(nature)なのか、それとも、社会の中で他の人間と相互にさまざまな行為を通して経験・習得されるもの(nurture)なのかという問題である。もし、感情が言語や思考と同じように他の人間との関係をもとに体得されるものであるなら、情意はその主体が置かれた環境によって違ったものとなる。すると、感情表現の意味は社会や文化によって異なると考えられる。[1]

また、意味が社会や文化によって異なるのは感情表現のみではなく、色彩も社会・文化により異なるものである。たとえば、日本の文化では、「赤」という色は血や火、太陽といった象徴的な意味が連想されるものである。また、一般的におめでたい時に用いられる色でもある。一方、西洋文化でも、「RED」という色は血や火などを連想させる色であるが、さらに「愛・情熱」によく結び付く。[2]見れば同じ色であるにもかかわらず、なぜそれが表す意味が違うのだろうか。そこには何か文化の違いがあるはずである。

先行研究としては、新留(2011)が日本語・英語・中国語の色に関する感情比喩表現を研究しているが、それには問題がある。彼の分析は十分ではなく、表現の異同に止まっており、表現の由来についてはまだ明らかにされていないのである。また、新妻(2013)は心的状態を表す英語の色彩語メタファーという研究を行い、感情やイメージといった抽象的な領域を、視覚によって確認できる色彩という具体的な領域によって表している可能性につ

---

[1] 泉子・K・メイナード、恋するふたりの「感情ことば」、くろしお出版、2001 年、 p .12

[2]赤祖父哲二、他(編集委員)、日・中・英言語文化辞典、マクミランランゲージハウス、2000 年

いて考察した。ところが、色彩領域から感情領域への意味理解のプロセスについては大まかにしか言及していない。したがって、本稿では、日本語の慣用句・英語のイディオムにおける色彩による感情表現にはどのような概念メタファーが成立しているのかを分析し、色彩という起点領域から感情という目的領域へ至る意味理解のプロセスはどのような共起性を基盤にしているかを明らかにする。また、その裏にどんなストーリーがあるのか、文学・文化という歴史的な背景を調べていく。

この研究の方法としては、まず複数の慣用句辞典などから赤・黄・緑・青・白・黒という 6 つの基本色を使う感情表現を例として集める。次にそれらの表現を 6 グループに分け、それらの意味を調べる。そして、それらの表現において色彩領域から感情領域への意味理解のプロセスがどうなっているか、どのような概念メタファーが成立しているかをメトニミーと認知メタファー理論に基づいて分析する。たとえば、「赤面する」という表現は、ただ顔が赤くなるということを意味するのではなく、「恥ずかしい」という感情を表している。原因と結果の因果関係におけるメトニミーと考えれば、顔が赤くなることと恥ずかしいと感じることは隣接する出来事、状態によるものであると言える。つまり、「恥ずかしい」という感情が原因となってその結果、顔や身体の一部の色が変わると解釈することにより、「恥は赤」という概念メタファーが成立するのである。このように、6 色をすべて分析することにより、取り上げた表現がどのような文化ファクターに関わるのか、どのような文化的な背景があるのかを探っていく。

## ２．定義

本研究では専門的な用語を多く使うため、それらを理解しておいていただかなければ、読んで意味が理解できない可能性がある。そこで、以下のように説明させていただく。

### 2.1 慣用句

「慣用句」の定義にはいまだに決定的なものがないが、おおよそ一般的な共通理解としては宮地裕(1982a)の定義が妥当と言える。すなわち「慣用句」とは「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」である。
(日本語慣用句辞典、 p .357)

さらに、慣用句とは次のような下記の例である。

① 「腹が黒い」は黒い腹という意味ではなく、意地が悪くて心の中で良くないことを考えたり悪いことをたくさんしているという意味である。

② 「白い目で見る」は眼球の白い部分で物を見るという意味ではなく、冷淡な目であるいは憎しみや反感を含んだ態度で人を見るという意味である。

### 2.2 イディオム

イディオム(idiom)とは、「構成要素の交代をほとんど許さず、一つの意味単位をなし、しかもその全体の意味が構成要素から推測しにくい語群」と定義してよいであろう。たとえば、Keep you shirt on.「落ち着け」という意味は「シャツを脱ぐな」からは出てこない。また、grow too big for one's boots は、「大きくなりすぎて自分のブーツが履けない」という意味ではなく、「うぬぼれる」という意味である。

このように厳密に考えれば、a red flower（赤い花）/ a clever girl（利口な少女）の類いはイディオムではない。これらは語群ではあっても、自由な結びつきであり、a blue[purple, yellow, etc.] flower/ a wise [pretty, foolish, etc.] girl と言葉を替えられるし、語群全体の意味は、構成する単語の意味から理解できるからである。（三省堂英語イディオム・句動詞大事典、2011 年）

### 2.3 メトニミー

換喩(METONYMY)は、あるものを、それに関係する他のものによって表す言葉のあやの一種である。この場合、問題となる二つのものの間の関係は、空間的な隣接性や近接性、共存性による関係であったり、また時間的な関係、因果的な関係であったりする。

具体的にみた場合、この換喩的な関係としては、次のようなものが考えられる。これらは、あくまで換喩的な関係の典型であり、これらだけではない。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 容器－中身 | 材料－製品 | 主体－手段 | |
| 主体－付属物 | 作者－製品 | 原因－結果 | （山梨　1998：p.94） |

本稿は原因－結果の因果的な関係によって色彩領域から感情領域にいたる意味理解のプロセスを分析していく。原因－結果の定義は以下のようなものである。

#### 2.3.1 原因と結果

あるものが原因となって他のものが存在するにいたるならば、この両者は、それが具体的な存在か抽象的な存在かはべつにして、広い意味で起因関係にあるといってよい。（山梨　1998：101）

以上のことを踏まえれば、「赤面する」という感情表現は、顔が赤くなるということを意味するのではなく、「恥ずかしい」という感情を表している。メトニミーの原因と結果あるいは因果関係から見れば、顔が赤くなることと恥ずかしいことはお互いに接近した出来事や状態によるものであると分析できるだろう。つまり、「恥ずかしい」という感情が原因となってその結果、顔や身体の一部の色が変わっていくと解釈できる。

### 2.4 概念メタファー

Lakoff and Johnson(1980、1999；Lakoff　1990、1993)は、メタファーを「ある概念を

別の概念と関連づけることによって、一方を他方で理解する」という認知プロセスとして広く捉え直した。

この認知プロセスを介して、私たちは日常の具体的な経験に基づき、抽象的な・主観的な対象を理解している。その結果、私たちの概念体系の中には、ある具体的な概念と別の抽象的な概念との間の対応関係が生まれ、この概念と概念の対応関係が概念メタファーと呼ばれている。また、Lakoff and Johnson(1980)は、その概念に関しては、抽象的で、身体的な経験があまりない概念、すなわち喩えられるものを目的領域と、具体的で、よく経験される概念、すなわち喩えるものを起点領域をと名づけ、概念メタファーを「目的領域 IS　起点領域」と表記する。たとえば、下記のようものが概念メタファーの例である。

ARGUMENT IS WAR　（議論は戦争である）

この概念メタファーは具体的なものである「戦争」という起点領域から、抽象的なものである「議論」という目的領域への写像である。この概念メタファーは様々な表現をとって日常語の中に表れている。

① Your claims are indefensible.（君の主張は守りようがない。）
② He attacked every weak point in my argument.（彼は私の議の弱点をことごととく攻撃した。）
③ His criticisms were right on target.（彼の批判は正しく的を射ていた。）
④ I demolished his argument.（私は彼の議論を粉砕した。）
⑤ I’ve never won an argument with him.（私は彼との議論に一度も勝ったことがない。）
⑥ He shot down all of my arguments.（彼は私の議論をすべて撃破（＝論破）した。）

(Lakoff and Johnson 1980)

上の例は、経験的に把握している具体的な「戦争」というものを起点領域に用いて、抽象的なものである「議論」という目的領域を理解しようとするものである。すなわち、議論には勝ち負けがあり、議論の相手は敵と見なされ、相手の議論の立脚点を攻撃し、自分の立脚点を守る。優勢になったり、劣勢になったりする。戦略が立てられているのである。つまり、議論は武器や武力で戦うものではないが、言葉で戦うものであって、実行される。議論の中でわれわれが行うことの多くは戦争という概念によってその構造を与えられている。それは攻撃とか防御、反撃といった議論の構造の中に表れているのである。「議論は戦争である」という概念メタファーは、こうした文化の中で生きているわれわれの日々の営みに構造を与える概念メタファーの１つである。ほかにも概念メタファーの例としては以下のようなものがある。

TIME IS MONEY　（時は金なり）

この概念メタファーは具体的なものである「お金」という起点領域から、抽象的なもの

である「時間」という目的領域への写像である。この概念メタファーは以下のような表現となって日々の生活に表れている。

① You're wasting my time.（君は僕の時間を浪費している。）
② This gadget will save you hours.（この機械装置を使えば、何時間も節約できる。）
③ I don't have the time to give to you.（君にやれる時間の持ち合わせはないよ。）
④ How do you spend your time these days.（この頃どんなふうに時間を使っているの。）
⑤ That flat tire cost me an hour.（あのパックしたタイヤを修理するのに 1 時間かかった。）
⑥ I've invested a lot of a time in her.（彼女には随分時間をさいてやったよ。）

(Lakoff and Johnson 1980)

上に取り上げた例を使い、Lakoff and Johnson(1980)は「時」という抽象的な概念を理解するために、「お金」という具体的な概念を用いていると説明する。つまり、時間はお金のように貴重なものであり、限りある資源である。また、われわれは時間を、使ったり、浪費したり、配分したり、投資したり、節約したり、乱費したりできるものとして理解し、経験しているのである。しかし、時間が以上のような概念として捉えられていない文化もあると説明している。つまり、概念メタファーの理解には、文化性あるいは文化的な背景も影響を与えるのだろう。

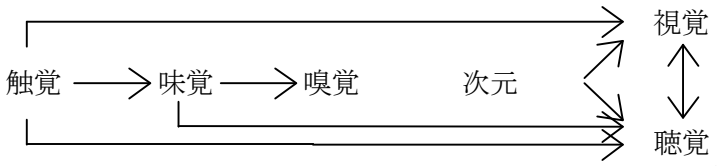
「ARGUMENT IS WAR」と「TIME IS MONEY」という概念メタファーはどちらも、具体的な起点領域から、抽象的な目的領域へと意味が拡張している。新妻(2013)は抽象的なものである「感情」と具体的なものである「色彩」の場合には、具体的な領域から抽象的な領域へと意味が拡張すると言う。それを踏まえると、「感情は色彩である」という概念メタファーが存在すると仮定することができるのではないだろうか。しかし、坂本(2007)は「感情は色彩である」という概念メタファーの存在に関しては問題点を指摘している。それは、抽象的なものである「感情」と具体的なものである「色彩」の間には客観的な類似点がないということである。それについては、Lakoff and Johnson(1980)以来、認知言語学がメタファーの基盤としては、類似性よりも共起性基盤 (経験的基盤、身体性基盤ともいう)が重要と見る考え方を提案している。例えば、Lakoff and Johnson(1980)は、"I'm feeling up"や "I'm feeling down"といった表現に反映される「HAPPY IS UP」と「SAD IS DOWN」という概念メタファーが挙げ、それらは感情と方向性には客観的な類似はないが、人間はうれしいと身体が上向きになり、悲しいと身体が下向きになるという経験的基盤に基づいていると説明している。その他、 "boil with anger"や "be burned up" といった表現に反映される「ANGER IS HEAT」という概念メタファーは、人間は怒ると熱くなるという感情の経験と体温の知覚経験の間の共起関係に基づくものとして説明される。また、Taylor(2003)は "black mood"というメタファー表現を色彩が感情に転写された共感覚メタファーの例として挙げている。

“black mood”というような表現は、共感覚表現と呼ばれ、辻(2002)により、以下のように定義されている。

「共感覚」(synaethesia＜Gk.syn ‘together’+ aesthesis ‘perception’)とは、１つの感覚刺激(例えば音)が、それに対応する感覚(例えば聴覚)だけではなく、別の感覚(例えば色の認識)と同時に生じるような現象を言う。この共感覚が基盤となって、「黄色い色」のように１つの感覚を表す語(視覚認識を表す「黄色い」)を、他の感覚(聴覚)を表すために比喩として転用することがよくある。

共感覚表現における転用は、低次の、あまり分化されていない感覚から高次の、より分化された感覚へなされることが以前から指摘されていたが（Ullmann(1962：p.227)参照）、Williams(1976)はそれを図１のように明確に図式化している。

**図** 1

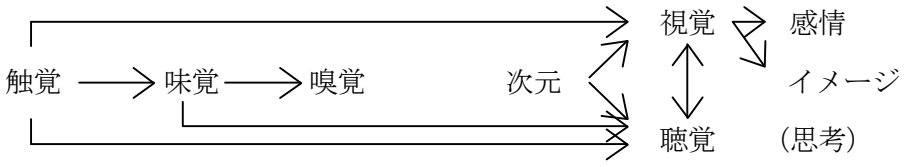



（辻 2002）

図１に表された転用の方向性について Williams(1976)はこれが感覚層の系統発生的、個体発生的な順序を表していると言う。また、安井(1978)は図の右に行くほど識別可能な感覚対象の数は増えるが、それに見合う固有の感覚表現の数がないため、低次の感覚表現から借りてこざるをえないとしている。

ところで、図１では「感情」は示されていないが、現実には「ほろ苦い気分」、「甘い気持ち」というような「感情」を「味覚」によって表す表現もある。色に関わる感情表現では「感情」を「色彩」によって表現するため、「視覚」を使い比喩として転用していると言える。ところが、「感情」を「味覚」によって表すような表現も存在するため、「感情は色彩である」という概念メタファーを仮定することには問題が残る。新妻(2013)はこの問題点を解決するために、色に関する感情表現は共感覚によるものであると仮定し、辻(2002)による共感覚を転用する方向性を示した。そして、図２のように新たに「感情」や「イメージ」を位置づけ、次のような考え方を提案している。

**図２**




（新妻 2013）

図 2 において、「色彩」は視覚に含まれると考えることができるため、色に関わる感情表現によって表現する動機について考えることができる。例えば、「怒っている」という感情を表現する場合、どのように怒っているのかを表現するために、感情より低次の感覚表現である視覚から借りるというシステムが機能していると言えるのではないだろうか。すると、「怒っている」という感情を表すのに、「See red」や「White at the lips」など、異なる色彩を用いてその感情を詳細に表現できると考えられる。また Lakoff and Johnson(1980)によれば、「ANGER IS HEAT」という概念メタファーに示されているように、人間は怒ると熱くなるという感情の経験と体温を感じた経験の間の共起関係に基づいて感情を色彩によって表す共感覚を説明している。すなわち、「怒り」という感情を表すために「視覚」が転用されたり、「触覚」が転用されたりするという分析が可能になるのではないだろうか。【新妻(2013)】

そこで、次の項目では具体的で、視覚によって認識できる「色彩」という起点領域によって、抽象的なものである「感情」という目的領域を表すにはどのような共起性基盤、すなわち、どのような経験的基盤・身体的基盤があるかを分析することで、どのような文化性がそこにあるかを探っていく。

## 3.日本語・英語における色を使う感情表現メタファーの分析

ここでは研究対象とした色をそれぞれ分析していく。メトニミーと認知メタファー理論に基づくと、どのような概念メタファーが成立するか、意味理解のプロセスはどのような共起性の基盤、経験の基盤に基づいているか、また、どのような文学的・文化的・歴史的な背景、すなわち文化性があるかを探っていく。とりあえず、「赤」という色から、黄・緑・青・白・黒まで順に考察していく。

### 3.1 赤(RED)

日本語の赤は最も目立つ印象的な色であり、血や火、太陽といったものが象徴する意味を連想する。また、現代の日本において、赤という色は一般におめでたい時に用いる色である。赤という色は英語に翻訳すると、RED になる。英語の RED も、血や火などを連想させる色である。さらに、英語の RED は「愛・情熱」も表す。ところで、赤(RED)を使う感情表現にはどのような概念メタファーが成立するのか、どのような共起性の基盤に基づいて理解すればいいかを分析しながら、同時にどのような文化性、文化的な背景があるかを調べていく。

#### 3.1.1 恥は赤(EMBARRASSMENT IS RED)

**日本語**： 1. 彼はいつになく少し赤面して、俯向いた。[3]

[3]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、 p .259

2. 「金井さんのウンコ、とぐろ巻いてたよ」と言った。金井は真っ赤になって俯いた。[4]
3. 自分のほうが思い違いをしていることにはっと気づき、赤恥をかいてしまった。[5]

英語：
4. Her cheeks burned redder and redder.
（彼女のほほはだんだん赤くなった。）
5. He went red with shame. （彼は恥ずかしさで真っ赤になった。）

これらの例から日本語の赤と、英語の RED には共通点があるということが分かる。その共通点は、取り上げた 1-5.の文例から見れば、「恥」という感情を表すと考えられる。メトニミーの基盤になる因果関係から見れば、人前で恥ずかしい思いをした時は、交感神経が非常に働き、心臓への血流が増加し、血の気で顔が赤くなる状態を引き起こす原因である「恥ずかしい」という感情を指示する。もしくは、認知言語学にもとづき共起性基盤から分析すると、人間は恥ずかしくなると、血の気が際立って顔色に表れるという経験に基づいていると言える。つまり、「恥は赤(EMBARRASSMENT IS RED) 」という概念メタファーは、目的領域である「恥」という感情を、「恥ずかしい」という感情の経験と、「顔が赤くなった」経験の間の共起関係に基づき、起点領域である視覚によって認識できる「赤」という色彩によって表すのである。

### 3.1.2 怒りは赤(ANGER IS RED)

英語：
6. Well, I admit I saw red, and didn't much know that I was doing.
（とにかく僕も認めるが、かっとなって自分が何をしているかよく分からなかったのだ。）
7. Her mother saw red when she took a look at what she wore.
（彼女の母は彼女の服装を見て激怒した。）（新留、2011）

「See red」という表現は、「赤」という色彩を見ることを意味するのではなく、顔が赤くなるという状態をもたらす原因である「怒る」という感情を指示している。因果関係によるメトニミーと見れば、「怒り」という感情が原因となり、その結果として顔色が赤くなることが原因を指示すると分析できる。また、認知言語学で言う共起関係と見れば、人間が怒ると熱くなり、身体の一部が赤くなるという現象に基づいていると言える。つまり、「ANGER IS RED」という概念メタファーは、目的領域である「怒り」という感情を、怒ると体が熱くなり、身体部分といった顔が赤くなるという経験に基づいて、起点領

[4]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、ｐ.433
[5]井上宗雄、「言いたい内容から逆引きできる」例解慣用句辞典、株式会社創拓社、1992 年、ｐ.65

域である視覚によって認識できる「赤」という色彩によって表すと言えるのである。このように解釈できるのだが、「See red」という表現の由来を調べると、こういう文化的な背景があるという説明を見つけた。この表現は身体の生体反応ではなく、闘牛が赤い布に興奮することに由来すると言われているそうだ。（安藤、2011）

ちなみに、新留(2011)は「顔が赤くなる」という表現について以下のように例文を挙げて、分析している。

A. 彼は友達にバカにされて、腹が立って顔が赤くなった。
B. 彼は友達にバカにされて、顔が赤くなった。
C. 彼はその話を聞いて、顔が赤くなった。

ここに取り上げられた例文 A は、「赤」が用いられ、一見「怒り」という感情が表されていると見えるが、もし「腹が立つ」という表現がなければ、A.の「顔が赤くなった」という表現ははっきり「怒り」という感情を表していないと言える。例文 A から「腹が立つ」を抜き、例文 B のようにすると、「怒り」よりも「恥ずかしい」という感情のほうが際立ってくる。さらに、例文 C の「顔が赤くなる」というのはその話を聞くと、「怒っている」可能性もあれば、「恥ずかしく思っている」可能性もあるだろう。日本語では「赤」が「怒り」という感情を表現しないと判断できる。つまり、「顔が赤くなる」という感情表現は「怒り」か「恥ずかしい」か、どちらを表現するかは文脈によると考えられる。

表１は、日本語・英語における「赤」(RED)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているかを示す。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | |
|---|---|---|
| | 赤 | RED |
| 恥<br>(EMBARRASSMENT) | 1. 彼はいつになく少し赤面して、俯向いた。<br><br>2. 「金井さんのウンコ、とぐろ巻いてたよ」と言った。金井は真っ赤になって俯いた。<br><br>3. 自分のほうが思い違いをしていることにはっと気づき、赤恥をかいてしまった。 | 4. Her cheeks burned redder and redder. （彼女のほおはだんだん赤くなった。）<br><br>5. He went red with shame. （彼は恥ずかしさで真っ赤になった。） |
| 怒り(ANGER) | なし | 6. Well, I admit I saw red, and didn't much know that I was doing. （とにかく僕も認めるが、かっとなって自分が何をしているかよく分からなかったのだ。） |

| | | |
|---|---|---|
| | | 7. Her mother saw red when she took a look at what she wore.（彼女の母は彼女の服装を見て激怒した。） |

表 1 により、「恥は赤(EMBARRASSMENT IS RED)」という概念メタファーは日本語と英語に共通して見られることが分かる。つまり、日本語と英語では「恥」という感情は「赤」という色に喩えられるのである。なぜ「赤」という色を用いるのか。それは文化的な背景によってではなく、共起関係に基づいていると思われる。これは人間の身体的な反応だ。簡単に言えば、人間が人前で恥ずかしい思いをした時には、交感神経が非常に働き、心臓への血流が増加し、血の気で顔が赤くなるという経験にもとづいているのである。しかしながら、驚いたことに、「怒りは赤」(ANGER IS RED)というメタファーは、誰でも怒りで顔が赤くなるほど体温が上がってくるという共起関係を予想するのだが、実はこの表現は身体の生体反応に由来するのではなく、は闘牛が赤い布に興奮することに由来すると言われているそうだ(安藤、2011)。このことから、「怒りは赤」(ANGER IS RED)という概念メタファーの成立には文化が影響を与えると言えるだろう。

### 3.2 黄色(YELLOW)

黄色は同じ色相の金色と違い、マイナスのイメージがあることは、日本語と英語で共通しているのだが、黄色(YELLOW)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているのか、どのような共起性に基づいて理解されるのかを分析し、また、どのような文化性、文化的な背景があるかを調べていく。

#### 3.2.1 臆病は黄色(COWARDICE IS YELLOW)

**英語**　：　8.　Tom is a yellow-bellied guy.（トムは小心者だ。）

8.の例文に書いてある「Yellow-bellied」は黄色い小腹をしていることを意味せず、「臆病」を意味する。この表現は、イギリス東部の Fens という地域で生まれた人を愛称として呼ぶのに使われるそうだ。しかし、それに対する反論もあるようだ。「Yellow belly」という表現は人間の顔色や血色などは連想させないし、象徴的な意味もないとはいえ、「lily-livered」という表現とは関係があるのだろうという異論もあるという。[6] ちなみに、文例 9 の「Yellow livered」は「lily-livered」とも関係があるかもしれない。

9. The young man greatly resented being called yellow livered.
（若者は意気地なしと言われたことに激怒した。）

[6] http://www.phrases.org.uk/meanings/yellow-belly.html

「Yellow livered」という表現は確かに「臆病」や「意気地なし」を意味するのだが、例文 8-9 を身体性に立脚する認知言語学からみれば、人間が病気になると、肝臓が弱くなり、健康な状態を表すと言われている茶褐色から黄色く変わるということを背景としているのかもしれない。ところが、他の可能性もある。「Yellow livered」という表現が普及する前に「lily-livered」という表現が使われていたそうだ。この表現は 1605 年『マクベス』というシェイクスピアの作品で使われているという。シェイクスピアは、顔色が悪い状態や血の気のない状態を表すために、「黄色い百合」あるいは Lily という花だけを用いて喩えており、「Yellow livered」という表現が広く使われるようになるまで「臆病」を表す場合、「lily-livered」が使われていたそうだ。それに「lily livered」という表現は「Yellow livered」という表現のみならず、「Yellow belly」という表現の起源と言えるのだろう。

10. He has a yellow streak running down his back and is not a good person to expect to support you when things become difficult.
（彼は臆病であり、状況が困難な時にあなたを助けてくれそうな良いひとではない。）[7]

「A yellow streak down one's back」という表現はメトニミーや共起性に基づいて分析しがたいのだが、中田(2011)によると、アメリカでは「Yellow streak」のある犬は臆病と見られるそうだ。

表 2 で日本語・英語における「黄色」(YELLOW)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているかを示す。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | |
|---|---|---|
| | 黄色 | YELLOW |
| 臆病(COWARDICE) | なし | 8. Tom is a yellow-bellied guy.（トムは小心者だ。）<br>9. The young man greatly resented being called yellow livered.（若者は意気地なしと言われたことに激怒した。）<br>10. He has a yellow streak running down his back and is not a good person to expect to support you when things become difficult.（彼は臆病であり、状況が困難になった時にあなたを助けてくれそうな良いひとではない。） |

表 2 は、「臆病は黄色」(COWARDICE IS YELLOW)という概念メタファーは英語には存在するが、日本語には存在しないことを示す。「臆病は黄色」(COWARDICE IS YELLOW)という概念メタファーは経験と身体現象の共起性を基盤に成立するのではなく、

[7] 中田詩乃、色と Color の比較を通したイディオム研究

文化性によって成立することが分かる。その文化性は、例えば、イギリス東部のある民族の愛称や Lily という花、犬の特徴に由来している。しかしながら、経験に基づいて分析できないわけではない。経験的な事実から見れば、人間は病気になると、肝臓が弱くなり、内臓が茶褐色から黄色く変わるものである。そうなるにつれて、体が弱くなり、臆病になると考えられる。

### 3.3 青(BLUE)

日本語の青は、「青空」や「青海原」などの語が示すように、一般によく晴れた空の色や澄んだ海の色と説明される。また、青という言葉に関しては、自然を対象とする場合はその色とともにプラスのイメージをもつ語があるのに対して、人間についてはマイナスの意味で用いられることが多いという偏りがみられ、それが特徴といえる。ところが、英語の BLUE も澄み切った青空や晴天の日の深い海の色とも説明されるが、永遠性、不死などに結び付けて捉えられることが特徴となっている。ところで、青(BLUE)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているのか、どのような共起性に基づいているかを分析し、また、どのような文化性、文化的な背景があるかを調べていく

#### 3.3.1 怒りは青(ANGER IS BLUE)

**日本語**： 11. 田畑君の笑いかたは冷んやりしたものであった。青柳君は真青になって、田畑君が何を云っても返事をしなかった。[8]

文例 11 に取り上げた表現は「怒り」を意味する。「怒り」といえば、だいたいの人が「赤」という色をよく連想する。人間の血は赤いから、「赤」によく結びつくのだ。しかし、文例 11 の場合はそうではない。この文例で使われた「青」は血の色ではなく、青筋を指す。因果関係のメトニミーからというと、「怒り」という感情が原因となって顔などが「青」く変化すると解釈できる。また、認知言語学の視点に立てば、人間が怒っている時、顔に表れるのは血の気だけではない。青筋も表れるものであり、怒れば怒るほど青い色をしている青筋がはっきり見えるようになるという共起性に基づいている。そのため、「怒りは青」という概念メタファーは、「怒り」という感情の経験と、血圧が高くなり、はっきり現れた青筋を見た経験の間の共起関係に基づき、目的領域である「怒り」という感情を、起点領域である「青」という色によって表すのである。

**英語**： 12. You can argue until you're blue in the face, but I refuse to go.
（あなたは激怒するまで言い争ってもいいけれど、私は行かない。）

---

[8]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、 p .157

文例 12 の「Blue in the face」について中田(2014)は疲労・緊張・激怒してへとへとになった状態だと述べている。因果関係によるメトニミーでいえば、「怒り」という感情によって顔色が「青」く変化するためと解釈できる。また、認知言語学の視点に立てば、人間が怒ると顔色が赤くなることもあれば、顔色が青くなるほど酸欠状態になることもあるという経験に基づいている。つまり、「ANGER IS BLUE」という概念メタファーは目的領域である「怒り」という感情を、体が酸欠状態に陥った経験に基づき、起点領域である「青」という色によって表すのである。

### 3.3.2 恐怖は青(FEAR IS BLUE)

**日本語**： 13. 顔色が蒼くなるのを感じる[9]

14. 青褪めて鼻から口元へ震えが走る。[10]

15. 妻は蒼い顔をし、どうしても一人で寝られないといった。[11]

16. 蒼白になり唇が硬張る。[12]

**英語**： 17. He was in blue funk. （彼は怖がっている。）

18. Are you in a blue funk about running out of things to say.
「あなたは言い出すことを怖がっているのか。」

19. He went blue in the face when discussing the faults of his boss.
（彼は上司の過失を検討した際、顔を真っ青にした。）

(新留、2011)

文例 13 -19 として取り上げられた表現はすべて「怖い」を意味をしているが、これらの例では因果関係によるメトニミーと見れば、「怖い」という感情が原因となって、顔や鼻、唇といった身体の部分の色が視覚的に「青」く変化するためと考えられる。また、「顔色が青い」、「青白い」、「青くなる」、「青褪める」などの表現は、病気や恐怖、心配などのために顔色が悪い(悪くなる)さまを意味し、「青息吐息」という表現もこれに近い。これらの顔に表れる「青」は文字通りの青色を表すのではなく、普通より血の気、赤みが失せて見えるという経験に基づいた説明が可能だろう。[13]つまり、「恐怖は青」(FEAR IS BLUE)という概念メタファーは目的領域である「恐怖」という感情を、顔や鼻、唇などの血の気あるいは赤みが失った経験に基づき、視覚によって起点領域である「青」という色によって表すと言える。

---

[9]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、 p .232
[10]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、 p .232
[11]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、 p .232
[12]中村明、感情表現辞典、東京堂出版、1979 年、 p .232
[13] 赤祖父哲二、日・中・英言語文化辞典、2000 年、 p .21

さらに、英語の Blue は「怒り」と「恐怖」という感情を表すだけでなく、「憂鬱」や「驚き」といった感情の表現にも使われている。例えば、以下のような文を例として挙げられる。

3.3.3 憂鬱は青(DEPRESSION IS BLUE)

英語：　20. Today is blue Monday. （今日は憂鬱な月曜日だ。）

「Blue Monday」という表現はメトニミーでも、認知言語学の共起性に基づいても説明できない。しかし、この表現には文化的な背景がある。ヨーロッパでは、1 月ごろの 3 週目の月曜日は一番憂鬱になる日だと信じられているそうだ。そのため、「Blue Monday」という表現がよく使われる。日本人やアジア人に向かって「明日は青い月曜日」と言っても、その人たちは何が言いたいのか分からないだろう。日本やアジアの文化では、そういう考え方がないからである。従って、「DEPRESSION IS BLUE」という概念メタファーは文化性により成立すると言える。

3.3.4 驚きは青(ASTONISHMENT IS BLUE)

21. Let her alone, She is in the blues now.
(そっとしておきなさい。彼女は今、落ち込んでいるから。)[14]

22. The news that I had won the competition came out of blue because I had forgotten all about it.
(そのコンテストに私が入賞したというのは、本当に思いがけないことだった。コンテストの事なんてすっかり忘れてしまっていたものだから。)

「In the blues」や「out of blue」という表現は「Go blue in the face」と同じように、人間は落ち込んだり、驚いたりすると、顔の血の気が引くという共起関係に基づいた分析が可能だ。

表 3 は日本語・英語における「青」(BLUE)を使う感情表現がどのような概念メタファーから成立しているかを示す。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | |
|---|---|---|
| | 青 | BLUE |
| 怒り(ANGER) | 11. 青柳君は真青になって、田畑君が何を云っても返事をしなかった。 | 12. You can argue until you're blue in the face, but I refuse to go. (あなたは激怒するまで言い争ってもいいけれ |

[14] 尾山　大、感覚で派生する英単語の意味と表現キーワード 100、2007 年、 p .168

| | | |
|---|---|---|
| | | ど、私は行かない。) |
| 恐怖(FEAR) | 13. 顔色が蒼くなるのを感じる<br><br>14. 青褪めて鼻から口元へ震えが走る。<br><br>15. 妻は蒼い顔をし、どうしても一人で寝られないといった。<br><br>16. 蒼白になり唇が硬張る。 | 17. He was in blue funk. (彼は怖がっている。)<br><br>18. Are you in a blue funk about running out of things to say. 「あなたは言い出すことを怖がっているのか。」<br><br>19. He went blue in the face when discussing the faults of his boss. （彼は上司の過失を検討する際、顔を真っ青にした。） |
| 憂鬱(DEPRESSION) | なし | 20. Today is blue Monday. （今日は憂鬱な月曜日だ。）<br><br>21. Let her alone, She is in the blues now. （そっとしておきなさい。彼女は今、落ち込んでいるから。） |
| 驚き<br>(ASTONISHMENT) | なし | 22. The news that I had won the competition came out of blue because I had forgotten all about it. （そのコンテストに私が入賞したというのは、本当に思いがけないことだった。コンテストの事なんてすっかり忘れてしまっていたものだから。） |

表 3 が示すように、日本語で概念メタファーが成立していると言える「青」を使う感情表現は二つしかない。「怒りは青」と「恐怖は青」という概念メタファーである。目的領域である人間が怒ったり、恐怖したりする感情は、血の気が引いたり、酸欠状態になったらするという経験に基づき、起点領域である「青」という色によって理解されると考えられる。また、日本語には、「憂鬱」や「驚き」といった感情を、「青」という色によって表す表現はないことが分かる。「憂鬱は青」や「驚きは青」という概念メタファーは存在しない。しかし、英語では、「DEPRESSION IS BLUE」と「ASTONISHMENT IS BLUE」という概念メタファーが文化性や共起関係によって成立していると考えられる。

### 3.4 緑(GREEN)

日本語の「緑」の語源については諸説あるが、草木の新芽を意味するという説が一般的で、もともとは色名ではなかったと見られる。また、「緑」という色そのものは、一般的に日本人にとって安心・平和・生命力などのイメージがある。一方、英語の「GREEN」は、一般的に、精神や心理の象徴となるだけでなく、母なる緑の大地のイメージから、

「生命、愛、健康」などを表す。一方、「死、毒、嫉妬」なども表す。すると、「緑」(GREEN)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているのか、どのような共起性に基づいて理解されるのかを分析し、どのような文化性、文化的な背景があるかを見ていく。

### 3.4.1 嫉妬は緑(ENVY IS GREEN)

**英語** : 23. Many a woman is victim of the green-eyed monster.
「ねたみに取りつかれる女性が非常の多い。」
24. His word awoke the green-eyed monster in the mind.
「彼の言葉が彼女の心に嫉妬心を目覚めさせた。」

「Green eyed monster」という表現は目が緑色をしている怪物に由来するわけではないが、初めて登場したのはシェイクスピアの作品だそうだ。『ヴェニスの商人』(1596 年)というシェイクスピアの作品に最初に登場した表現は「Green eyed」だったが、1604 年に『オセロ』という作品で「Green eyed monster」という表現が使われ、「嫉妬」という意味で広く使われている。また、『オセロ』では「Monster」という言葉は怪物ではなく、オセロのネガティブな感情のシンボルである。ネガティブな感情とは「嫉妬」である。従って、「ENVY IS GREEN」という概念メタファーはシェイクスピアによって作られた言葉に由来するため、文化性によって成立していると言えるだろう。

なお、母語として日本語を使っている日本人にとって「ENVY IS GREEN」という概念メタファーは理解しがたいはずだ。日本人は「緑」に対してどんなイメージを持っているのだろうか。「嫉妬」という感情ではなく、一般的に日本人は安心・平和・生命力といったイメージをもっており、アト・ド・フリース(1984 年)は伝統的に松の緑から来る永遠・不変のイメージ持っていると述べている。

表 4 は英語で「緑」(GREEN)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているかを示している。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | |
|---|---|---|
| | 緑 | 英語 |
| 嫉妬(ENVY) | なし | 23. Many a woman is victim of the green-eyed monster.「ねたみに取りつかれる女性が非常の多い。」<br>24. His word awoke the green-eyed monster in the mind.「彼の言葉が彼女の心に嫉妬心を目覚めさせた。」 |

表 4 で見るように、英語で「GREEN」を使う感情表現は 1 つしかない。それは「ENVY IS GREEN」という概念メタファーである。因果関係によるメトニミーからは見いだせないようだ。人間は嫉妬している時、顔や身体の一部にそれが表われることがないからだ。

また、共起性という基盤がないので、目的領域である「嫉妬」(ENVY)という感情を、起点領域である「緑」(GREEN)という色によって経験的に理解することは難しい。「ENVY IS GREEN」という概念メタファーが存在するのはシェイクスピアが作った言葉という文化性のよると言える。

### 3.5 黒(BLACK)

日本で「黒」という色は、その性質から見ても、ネガティブで、不吉なものを象徴すると考えられている。日本語においても、黒い動物や黒い衣服、装飾などは不吉、凶事との関わりが多いが、一方では、古来美しい色、よい色と認められてきたようである。英語の「BLACK」は、Light（光）の対極にある「夜、闇」、つまり光のまったくない状態を表す。しかし、「BLACK」は希望・謙虚・無垢を暗示することもあったそうだ。ちなみに、黒(BLACK)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立するのか、どのような共起性に基づいて理解されるのかを分析し、どのような文化性、文化的な背景があるかを調べていく。

#### 3.5.1 怒りは黒(ANGER IS BLACK)

英語：　25. The manager gave me a black look when I came late this morning.
（今朝遅刻すると課長が怒ったような顔をした。）
26. He pulled till he was black in the face.
（彼は顔が赤黒くなるまで激しく引っ張った。）
27. He looked blacks on me.（彼は険悪な顔をして私を見た。）

文例 25-27 から、英語では、「ANGER IS BLACK」という概念メタファーが成立していると言える。因果関係によるメトニミーから分析すると、「怒り」という感情が原因となって顔色が「黒」く変化するからだと解釈できるだろう。また、共起性を基盤に分析すれば、人間は怒りに燃えている時、顔や腕といった体の部分に黒っぽい静脈がよく浮き出る。つまり、「ANGER IS BLACK」という概念メタファーは目的領域である「怒り」という感情を、「怒りに燃えたことで、血圧が高くなり、静脈が黒っぽく浮き出るという共起関係に基づき、起点領域である「黒」という色によって理解されると言えるのである。

#### 3.5.2 憂鬱は黒(DEPRESSION IS BLACK)

英語：　28. He has got the black dog on his back.（彼はまだ不機嫌なままだった。）
29. The black dog was on his back. as people say, in nursery metaphor.
（子育てのたとえで世俗に言うように、彼は不機嫌であった。）
30. Mom was under the black dog again.（ママはまた不機嫌だった。）

例文 28-30 に使われた「Black dog」という表現は黒い犬を意味しない。この表現の文化性を調べてみると、16 世紀のイギリスの民話、ロマン派の詩の中で「Black dog」という表現は「憂鬱」、「不機嫌」という意味の比喩になるそうである。すると、「DEPRESSION IS BLACK」という概念メタファーは文学的な背景によって成立していると言える。因果関係によるメトニミー、また共起性を基盤とした分析からは、まったく理解できないようだ。

### 3.5.3 驚きは黒(ASTONISHMENT IS BLACK)

日本語：　31. こんなお勘定で眼を白黒させるくらいなら、最初から銀座へなんか、こなけりゃいいのよ。

「目を白黒させる」という表現は予想外の事に驚き、どう対処してよいかわからず、あわてふためくさま。また、体の痛みに苦しんで目をぐるぐる動かす[15]という意味である。因果関係によるメトニミーからみれば、「驚き」という感情が原因となって、その結果、目の色が白くなったり、黒くなったりする変化だと解釈できる。また、認知言語学の視点に立てば、人間は思いがけない事に驚くと、目をぐるぐる動かすという経験に基づいて説明できる。つまり、日本語における「驚きは黒」という概念メタファーは、目的領域である「驚き」という感情を、驚いて、目の色が白くなったり、黒くなったりするという経験的に基づき、起点領域である「黒」という色によって表されているのである。

表 5 は、日本語、英語における黒(BLACK)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているかを示している。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | |
|---|---|---|
| | 黒 | BLACK |
| 怒り(ANGER) | なし | 25. The manager gave me a black look when I came late this morning. （今朝遅刻すると課長が怒ったような顔をした。）<br>26. He pulled till he was black in the face. （彼は顔が赤黒くなるまで激しく引っ張った。）<br>27. He looked blacks on me. （彼は険悪な顔をして私を見た。） |
| 憂鬱(DEPRESSION) | なし | 28. He has got the black dog on his back. （彼はまだ不機嫌なままだった。）<br>29. The black dog was on his back. as people say, in nursery metaphor. （子育てで使うたとえで世俗に言うように、彼は不 |

[15] 米川明彦・大谷伊都子、日本語慣用句辞典、2005 年、p .490

| | | |
|---|---|---|
| | | 機嫌であった。）<br>30. Mom was under the black dog again. （ママはまた不機嫌だった。） |
| 驚き(ASTONISHMENT) | 31. こんなお勘定で眼を白黒させるくらいなら、最初から銀座へなんか、こなけりゃいいのよ。 | なし |

表 5 によって、日本語では「怒りは黒」と「憂鬱は黒」という概念メタファーは存在していないが、「驚きは黒」という概念メタファーが存在していることが分かる。一方、英語では、「ASTONISHMENT IS BLACK」という概念メタファーは存在していない。しかし、「ANGER IS BLACK」という概念メタファーは文化性とは関係なく、目的領域である「怒り」という感情が、「怒りに燃えて、血圧が高くなり、静脈が黒く浮き出るという共起関係に基づき、起点領域である「黒」という色によって理解される。一方、「DEPRESION IS BLACK」という概念メタファーはイギリスの民話という文学的な背景によって成立している。そして、日本語における「驚きは黒」という概念メタファーは、目的領域である「驚き」という感情を、驚いて、目の色が白くなったり、黒くなったりする経験に基づき、起点領域である「黒」という色によって理解される。

### 3.6 白(WHITE)

「白」という色は古来、他の色とは異なる特別な、霊力をもつ色とみなされ、珍重されると同時に、最も美的な感興を誘うものと考えられた。そして、「白」は、その色の特別さゆえの両義的なイメージを反映し、プラスにもマイナスにも取られる点が注目されるが、とくにマイナスの用法において日本語独自のものがあるようだ。英語の「WHITE」は雪、ミルク、塩などの色を指し、White Christmas は「雪の降るクリスマス」を意味する。すると、白(WHITE)を使う感情表現はどのような概念メタファーから成立しているのか、どのような共起性に基づいて理解されるのかを分析し、どのような文化性、文化的な背景があるかを調べていく。

#### 3.6.1 驚きは白(ASTONISHMENT IS WHITE)

**日本語：** 32. 思わずふり返って見ると、青白い顔をして、髪をふり乱して幽霊が、立っている、そんな空想がつい浮かんでくるものである。

**英語：** 33. On receiving the letter, his face went white.
（その手紙を受け取るとすぐに、彼の顔は白くなった。）

文例 32-33 から、日本語、英語では、「驚きは白」(ASTONSHMENT IS WHITE)という概念メタファーが成立していることが分かる。因果関係によるメトニミーと見れば、

「驚き」という感情が原因にとなって顔色が白く変わることが基になっていると解釈できる。また、認知言語学から見れば、人間が突然衝撃を受け、皮膚の交感神経が強く反応すると、顔の血管が収縮するため、顔が真っ白になるという共起性に基づいて説明できる。言い換えれば、「驚きは白」(ASTONSHMENT IS WHITE)という概念メタファーは、目的領域である「驚き」という感情を「驚くと顔色などが白く変わる」という経験に基づき、起点領域である「白」という色によって表す。

### 3.6.2 恐怖は白(FEAR IS WHITE)

**日本語：** 34. 相手の気勢に一瞬鼻白む。

35. 鼻白んでつまんでいると、その気分が顔に出ただろう。

**英語：** 36. The plane made a white knuckle to the fogged in air port.

（飛行機は霧に包むまれた空港に肝を冷やすような着陸進入をした。）

37. When he heard the news, he was white lipped.

（あのニュースを聞いたら、彼の唇の色が失せた。）

文例 34-37 から、日本語、英語では、「恐怖は白」(FEAR IS WHITE)という概念メタファーのあることが分かる。因果関係によるメトニミーと見れば、鼻や指の関節、唇などが白くなる原因である「恐怖」という感情を指すと言える。認知言語学の視点に立てば、人間は恐怖を感じて血の気が引いた時、顔色が白くなるという共起性に基づいていると考えられる。つまり、「恐怖は白」(FEAR IS WHITE)という概念メタファーは目的領域である「恐怖」という感情を、恐怖という感情の経験と身体の一部の色が変化するのを見た経験の間の共起関係に基づき、起点領域である「白」という色によって表すのだ。

### 3.6.3 臆病は白(COWARDICE IS WHITE)

**英語：** 38. Find a white feather in a person’s tail.

（人の臆病の気配を見てとる。）[16]

39. She was a white livered person.（彼女は臆病な人だ。）

文例 38 に使われている「White feather」という表現は因果関係によるメトニミーでも、認知言語学でも解釈しがいたい。そこでこの表現の文化的な背景を調べて見ると、「White feather」という表現は 1785 年ごろ現れた。もとは闘鶏の雄鶏の尾羽に白い羽があると、不良品種で闘鶏には弱いと考えられたことから、時代が変わり、人間の臆病を闘鶏の尾羽にたとえるようになったそうだ。

ところで、文例 39 にある「White livered」という表現はおそらく文例 9 の「Yellow livered」という表現と同様のものである。この表現は因果関係によるメトニミーからみれ

[16]赤野一郎ほか、小学館ランダムハウス英和大辞典、東京：小学館、1994 年、 p .3105

ば、「臆病」という感情が原因となって肝臓の色が茶褐色から「白」く変わるところから来ていると想像できる。また、共起性をもとに認知言語学の視点から見れば、人間が病気になると、肝臓が弱くなったり、健康な状態を示すと言われる茶褐色から白く変わったりすると同時に、臆病になることから来ていると解釈できる。

つまり、英語における「臆病は白」(COWARDICE IS WHITE)という概念メタファーは文化性によって成立していると言えるが、文化的な背景だけでなく、この概念メタファーは目的領域である「臆病」という感情を、「体調を崩し、肝臓が弱くなって白くなる」という経験に基づき、起点領域である「白」という色によって表しているとも言える。

表 6 は、日本語、英語における白(WHITE)を使う感情表現がどのような概念メタファーから成立しているかを示す。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | |
|---|---|---|
| | 白 | WHITE |
| 驚きは白(ASTONISHMENT IS WHITE) | 32. 思わずふり返って見ると、青白い顔をして、髪をふり乱して幽霊が、立っている、そんな空想がつい浮かんでくるものである。 | 33. On receiving the letter, his face went white. (その手紙を受け取るとすぐに、彼は真っ青になった。) |
| 恐怖は白(FEAR IS WHITE) | 34. 相手の気勢に一瞬鼻白む。<br>35. 鼻白んでつまんでいると、その気分が顔に出ただろう。 | 36. The plane made a white knuckle to the fogged in air port. (飛行機は霧に包むまれた空港に肝を冷やすような着陸進入をした。)<br>37. When he heard the news, he was white lipped. (あのニュースを聞いたら、彼の唇の色が失せた。) |
| 臆病は白(COWARDICE IS WHITE) | なし | 38. Find a white feather in a person's tail. (人の臆病の気配を見てとる。)<br>39. She was a white livered person. (彼女は臆病な人だ。) |

この表により、日本語、英語では驚きは白(ASTONISHMENT IS WHITE)と、恐怖は白(FEAR IS WHITE)という概念メタファーが存在していることが分かる。また、臆病は白(COWARDICE IS WHITE)という概念メタファーは英語にしか存在しない。また、驚きは白(ASTONISHMENT IS WHITE)と、恐怖は白(FEAR IS WHITE)という概念メタファーはショックを受けたり、恐怖を感じたりした時の感情の経験と身体の一部の色が「白」く変

化するのを見た経験の間の共起関係に基づいている。ところが、英語で臆病は白(COWARDICE IS WHITE)という概念メタファーは一概に文化性によって成立しているとは言えない。この概念メタファーは共起性によっても現れるからである。

## ４.結論

本稿では、日本語の慣用句、英語のイディオムにおける色を使った感情表現がどのような概念メタファーから成立しているか、また、どのような共起性を基盤としているか、そして、それぞれどのような文化的な背景を持っているかを考察した。下記の表７がその一覧である。

| 目的領域(感情) | 起点領域(色彩) | 言語 | |
|---|---|---|---|
| EMBARASSMENT(恥) | IS RED(赤) | 日本語 | 英語 |
| ANGER(怒り) | IS RED(赤) | 日本語 | 英語 |
| COWARDICE(臆病) | IS YELLOW(黄色) | 日本語 | 英語 |
| ANGER(怒り) | IS BLUE(青) | 日本語 | 英語 |
| FEAR(恐怖) | IS BLUE(青) | 日本語 | 英語 |
| DEPRESSMENT(憂鬱) | IS BLUE(青) | 日本語 | 英語 |
| ASRONISHMENT(驚き) | IS BLUE(青) | 日本語 | 英語 |
| ENVY(嫉妬) | IS GREEN(緑) | 日本語 | 英語 |
| ANGER(怒り) | IS BLACK(黒) | 日本語 | 英語 |
| DEPRESSION(憂鬱) | IS BLACK(黒) | 日本語 | 英語 |
| ASTONISHMENT(驚き) | IS BLACK(黒) | 日本語 | 英語 |
| ASTONISHMENT(驚き) | IS WHITE(白) | 日本語 | 英語 |
| FEAR(恐怖) | IS WHITE(白) | 日本語 | 英語 |
| COWARDICE(臆病) | IS WHITE(白) | 日本語 | 英語 |

表７は日本語、英語における「感情は色である」という概念メタファーの存在を表す。

表 7 により、EMBARASSMENT IS RED(恥は赤)、ANGER IS BLUE(怒りは青)、FEAR IS BLUE(恐怖は青)、ASTONISHMENT IS WHITE(驚きは白)、FEAR IS WHITE(恐怖は白)という概念メタファーは日本語、英語に共通であることが確認できる。すなわち、日本語・英語におけるそれらの概念メタファーは目的領域である抽象的な「感情」を、感情の経験と身体的な経験の間の共起関係にもとづき、視覚によって認識できる色という具体的な起点領域によって理解させると言える。また、身体的な共起関係に基づく概念メタファーは普遍性のあるものだと言える。日本語であれ、英語であれ、文化性が関わっていなくても、身体的な経験の間の共起性に基づく概念メタファーとしては、EMBARASSMENT IS RED(恥は赤)、ANGER IS BLUE(怒りは青)、FEAR IS BLUE(恐怖は青)、ASTONISHMENT IS WHITE(驚きは白)、FEAR IS WHITE(恐怖は白)などが確認できる。一方、英語における ANGER IS RED(怒りは赤)、COWARDICE IS YELLOW(臆病は黄色)、DEPRESSION IS BLUE(憂鬱は青)、ENVY IS GREEN(嫉妬は

緑)、DEPRESSION IS BLACK(憂鬱は黒)という概念メタファーは文化性、文化的な背景に由来することが確認できる。

**参考文献**


George Lakoff and Mark Johnson, Metaphor we live by, University of Chicago Press, 2003

Chris Huet, The dark companion : The origin of 'Black dog' as a Description for Depression, 2005

Dean Burnett ,"Blue Monday: a depressing day of pseudoscience and humiliation", The Guardian (London), 2006

Lakoff G., The contemporary theory of metaphor In Metaphor and thought 2nd ed., ed. Andrew Ortony, Cambridge University Press, 1993

Lakoff, G. and M. Johnson, Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenges to western thought, Basic Books, 1990

Lakoff, G., The invariance hypothesisi: Is abstract reason based on image-schemas? Cognitive Linguistics 1, 1990

Williams, J. M., Synaesthetic Adjectives: A Posisible Law of Semantic Universal, Language 52(2), 1976

アト・ド・フリース、『イメージ・シンボル事典(Dictionary of symbols and imagery)』、大修館書店、1984 年

赤祖父哲二、他(編集委員)、『日・中・英言語文化辞典、マクミランランゲージハウス』、2000 年

安藤貞雄編、『三省堂英語イディオム・句動詞大事典』、三省堂、2011 年

井上宗雄、『「言いたい内容から逆引きできる」例解慣用句辞典』、株式会社創拓社、1992 年

王艶、『感情表現の日中対照研究―「喜」の表現と「怒」の表現を中心に―』、聖徳大学の言語文化研究科出版、2012 年

坂本　真樹、『色彩語メタファーの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討』(楠見孝(編)、メタファー研究の最前線)、ひつじ書房、2007 年、ｐ.307-326

小学館『大辞泉』編集部編、『大辞泉』、小学館、1995 年

小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編、『小学館ランダムハウス英和大辞典』、小学館、1994 年

新留修一、『日本語・英語・中国語の色に関する比喩感情表現の考察―普遍性と文化的差異に注目して―』、天理台湾大学出版、2011 年

田中詩乃、『色と COLOR の比較を通したイディオム研究』、コミュニケーション文化 8 号、2014 年

年尾山大、『感覚で派生する英単語の意味と表現キーワード 100』、2007 年

中村明、『感情表現辞典』、東京堂出版、1979 年

鍋島弘治朗、『日本語のメタファー』、くろしお出版、2011 年

松本曜(編)、『認知意味論(シリーズ認知言語学入門第 3 巻)』、大修館書店、2003 年

山梨正明、『比喩と理解』、東京大学出版会、1998 年

辻幸夫、『認知言語学キーワード辞典』、研究社、2002 年

米川明彦、大谷伊都子編、『日本語慣用句辞典』、東京堂出版、2005 年